

教育実習指導Ⅰ（幼稚園）における授業内容の検討

恒賀康太郎¹⁾・永山 寛¹⁾・橋本真理子²⁾

(¹⁾九州大谷短期大学幼児教育学科 (²⁾福岡県立三潨高等学校教育学

1. はじめに

本学幼児教育学科に在籍する学生の多くは、保育士資格や幼稚園教諭免許状取得を希望している。本学にて幼稚園教諭二種免許状を取得するためには、1年次後期に開講される教育実習指導Ⅰおよび2年次後期に開講される教育実習指導Ⅱを受講するとともに、1・2年次後期それぞれに2週間の幼稚園教育実習（Ⅰ・Ⅱ）を行う必要がある。保育実習も含め、教育実習Ⅰは本学に入学してから本格的に行う初めての实習であり、教育実習Ⅱは本学で行う最後の実習でもある。教育実習は、学校現場での教育実践を通じて、学生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会であり、今後とも大きな役割が期待されるⁱことから、教育実習指導の内容や取り組みを充実させておく必要がある。

一方、近年の大学全入時代に伴い、学ぶ気持ちさえあれば誰でも専門的で高度な学びを得ることが比較的容易となってきた。しかし、競争意識や夢の実現に向けて強い意志を持った学生が減少傾向にあると一般的に言われており、高校卒業までに習得した知識や技能、大学生活での意欲や態度が異なる者が同じ場で学ぶということが生じている。例えば、中学や高校までに習得すべき漢字の読み書きや作文力不足の者、授業1コマ90分間の集中力を確保するのが困難な者、教員の意図する事由に対しての理解力不足の者など、大学入学後にも基礎的な学びを必要とする学生も散見される。わが国においては、これまでも増して教職課程の質的水準の向上として大学における組織的指導体制の整備が求められておりⁱⁱ、一人ひとりの学力や能力に応じて教育を行うことが望まれている。しかしながら、本学に

においては100人弱の学生を対象に一斉授業を行うカリキュラム体制である以上、個々に応じた教育や指導の徹底は現実的に困難であるため別の対策を講じなければならない。また、本学では諸事情により教育実習指導の担当教員が年次で入れ替わることもあり、引継ぎだけでは行き渡らない養成に関わる細部の動きを見直していく必要がある。指導担当教員それぞれの専門性の強みを活かしつつ、現代のニーズや学生の状況に合わせたシラバス及び授業構成が必要不可欠となる。

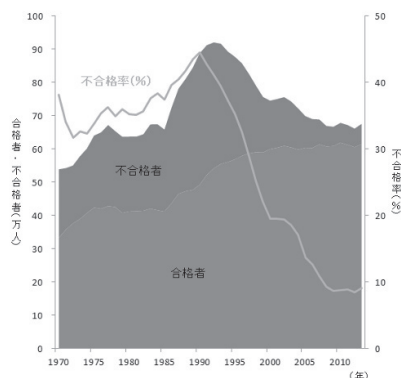


図1 大学受験の変化（文部科学省『学校基本調査』）

これまでの本学における教育実習指導は、概ね3名の教員が担当しており、事前打ち合わせのもと共通認識を持って指導にあたる。15コマの授業を①実習事前指導、②実習期間中の指導、③実習事後指導としており、事前指導に関してはガイダンスとして実習スケジュールや事務手続き等の確認、幼稚園の概要、実習生の心構え、実習の目的や意義の理解等を概ね過半数の授業コマにて行う。そのうちの実習直前の1コマを心身の準備や個々人の課題設定に充て、不安から楽しみへと意識の改変に努める。幼稚園は基本的に土曜日を休園としているため、実習中盤にあたる土曜日の2コマを帰校日とし、前半の実習の振り返りと今後の実習に向けての課題設定を行う。残りのコマでは実習事後指導として実習日誌の整理と振り返りのための自己評価やりフレクシオン（通称：アフターミーティング、以下AM）を行い、各自が実習で得た学び等を共有する。併せて、お礼状などのマナー指導も行う。

今回、指導担当教員が入れ替わった平成29年度の教育実習指導Ⅰの取り

組みを整理し、学生へ課したレポートから学びやニーズを把握するとともに、本学自己点検評価委員会にて実施した授業評価アンケートの結果を踏まえて今後の指導に向けてのあり方や課題について検討することを目的とした。

2. 教育実習の実際

(1) 本学・学科の教育方針から

教育実習は教育職員免許法施行規則第6条および第7条の規定を根拠とし、教職志望の学生が学びの場を教育現場において実際に経験することを指している。「学校の教育活動について実際に教員としての職務の一部を実践させることが中心」ⁱⁱⁱと位置付けられている教育実習において、本学では以下の教育方針に基づいて教育実習を大きく二つの段階に分けて目標を設定している。

○ 教育方針

一人ひとりの育ちに光を当てた真宗保育を探求し、専門的な知識と保育技術を身に付けることを教育内容とする。

主体性を持った遊びと生き生きした表現に焦点を当てたカリキュラムを通して、学生の学びと育ち合いを保障し、乳幼児や特別な支援を必要とする児童に寄り添い、保育や教育現場への応用力を持った保育者を育成する。

○ 教育実習Ⅰ

- ① 観察・参加を通して園児の園での生活と学びの実際を理解する
- ② 対象理解を深める
- ③ 教諭としての態度や姿について具体的に学ぶ

○ 教育実習Ⅱ

- ① 教諭としての必要な資質・技能の向上を図る
- ② 適切な援助や指導について学ぶ
- ③ 自己の幼稚園教諭像を形成しその実現に向けて課題を明確化する

る

これらの目標は、大学で学んだ理論を実践とつなげるとともに、実習先において幼稚園教諭に接することを通じて資格取得後の自分の将来像を具体的に形成する事にもつながっている。本学では、教育方針である「教育・保育といった幼児教育の多様な現場で活躍する人材の育成」に取り組んでおり、2年間の短い期間ではあるが、学内での理論や模擬実践的な学びに加え、実習での学びが大きなウェイトを占めることになる。【図2参照】

したがって、教育実習及びそれに伴う実習指導では、一教科として到達目標だけでなく、2年間のカリキュラムの中にある教員養成の到達目標を前提に位置づけて進めている。また、2年間の中で幼稚園教諭免許取得と保育士資格取得を目指す本学科では、保育士養成と関連させながらも、中には何度も繰り返し取り上げる中で学びが深まるものについては重複してシラバスに入れるなどして教育目標の達成を目指した教育実習指導を行っ

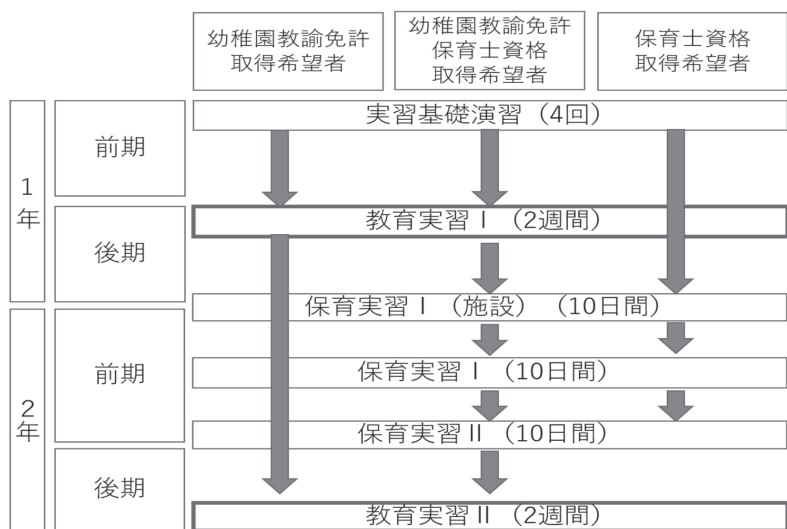


図2 本学科における主な実習とその流れ

ている。大きな流れとしては、教育実習Ⅰでは設定保育といった指導案に基づいた授業研究はあえて行わず、子どもとの関わりを重視したねらいとしており、一方、教育実習Ⅱでは大学の学びの蓄積や子どもとの関わりを考慮して指導案に基づいた活動を行うようにすることで資質・技能の向上を図ることとした。

（２）教育実習Ⅰにおける指導内容（教育実習指導Ⅰ）

１年次における「教育実習指導Ⅰ」では、前述のように２段階のうち前段となることから、子どもとの関わりや教師の動きについての指導を中心に据えながら、次の学びや保育資格取得にもつながることを視野に実習指導を展開している。

授業の詳細としては、表１のとおり、全１５回の授業を展開している。そして、段階的に実際の実習での身構えや心構え、物構えを整えていき、実習中盤で帰校日を設けて現状を把握し、情報を交流することで残りの期間に向けもう一度気持ちを整える機会を設け、授業の最後にはリフレクションを行うことで実習での学びを振り返るとともに、学生同士で体験や学びを共有することで学びが深まるようにカリキュラムマネジメントを行っている。

授業の展開としては、まず冒頭の４回で、実習スケジュールとそれに伴う事務的手続きから、実習の目的や意義、幼稚園自体や教育実習の法的位置づけからまで教育実習についての大枠を理解できるようにした。また、その後の４回で、視聴覚教材を使って幼稚園における現場の実際について理解を深め、教師としての役割や実習生としての身構えや心構え、物構えを整えていくこととした。その中で、実習の方法や内容について理解を促し、日誌の書き方や実習生としての留意点を具体的に理解していくよう配慮した。また、前述のように、多様な学生のニーズに応じて、事前打ち合わせの仕方や内諾書のもらい方など、形式的な部分に関しても学生が安心して実習に臨めるようにした。

実習期間中の中日には、帰校日を設けて現在の課題解決に向けた学生同士の情報交換や目標の再設定を行い後半の実習に臨めるようにした。

実習後は、AMを行うことで各自が実習で得た学びをまとめ共有するようになった。

(3) 教育実習指導Ⅰにおける指導

1) 事前指導における指導

前述のように、実習に向けた事前指導として法的な根拠や位置づけを基にした意義や目的を明確に持てるよう、教育基本法をはじめとして学校教育法及び施行規則、教育職員免許法について学ぶ機会を設定した。また、幼稚園において教員の動き、各学生の実習園の方針など具体的なイメージが持てるよう、視聴覚機器やタブレット端末等のICTを活用した指導を行った。

前述のように、実習指導に当たっては、指導形態も入念に計画を立てて

表1 教育実習指導Ⅰ シラバス

概要と目標 1年後期に行う幼稚園での2週間の教育実習に伴う、実習事前事後の指導を行う。		
授業 回数	授業内容	到達目標
1	ガイダンス：実習とそれに伴う手続きのスケジュールについて	実習スケジュールとそれに伴う事務手続きについて確認
2	幼稚園って？：学校教育法・幼稚園教育要領前文を読む	実習の目的、意義を理解する
3	幼稚園って？：自分の実習園について調べてみよう	幼稚園の概要と現状、実習園の独自性を知る
4	【実習前までに】心構えVTRから：幼稚園教育要領の各領域の内容を読む	実習生としての心構えと必要な準備を知る
5	【実習前までに】身構え：実習園との事前打ち合わせに向けて	実習生としての身構えと必要な準備を知る
6	【実習の方法と内容】見学・観察・参加：実習の課題を明確にする	実習の目的に向け準備を進め、実習の課題を把握する
7	【実習の方法と内容】記録と事例報告、日誌の書き方：もの構え	実習の目的に向けて客観的な記述の仕方を知り、準備を進める
8	【実習の準備】	実習先との打ち合わせなど、直前の課題を解決する。
9	帰校日	自己の実習1週間の振り返り及び具体的な目標の設定
10		グループワークによる情報共有
11	実習後の流れ：日誌の提出及びお礼状の作成	反省的な振り返りと自己評価ができるようにする
12	実習レポート作成と対議：アフターミーティングに向けて	記録の交流をもとに新たな気づきを得る
13	アフターミーティング準備	実習で得た新たな課題をグループで整理し共有する
14	アフターミーティング①	各自が実習で得た学びをアフターミーティングで共有する
15	アフターミーティング②	
評価：受講態度・意欲（50％）課題及び提出物（50％）		

主担当による一斉指導だけでなく、複数の担当によるチームティーチング（以下TT授業）を行った。TT授業では、3人それぞれが役割をもって指導に当たすることで、授業にリズムを持たせるとともに、きめ細やかな指導ができるようになった。図3で示すように、板書の半分で内容が区切り、指導担当が入れ替わりながら全体の学生の様子を見たり、見易い板書を心掛けたりすることに繋がっている。一般的に一斉指導を行った場合、どうしても一人一人の学びの進捗状況を把握したり疑問をその場で解決したりすることは難しいが、3人が1時間の中で細かくオムニバス形式をとり、主担当以外の教員に役割を持たせることで、授業の質的な向上を図った。

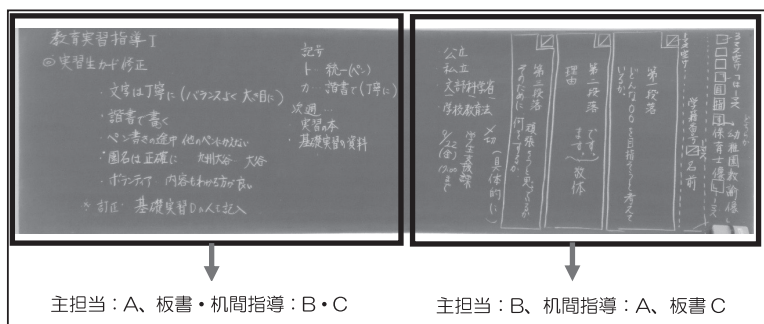


図3 事前指導2／15での板書及びその際の担当

また、このTT授業では、学生のICT活用を実現させることにも役立っている。というのも、調べるにはタブレット端末を利用する手法について十分な習熟が必要になり、机間指導などのきめ細やかな対応が必要となるからである。事実、普段からスマホを利用している学生でも、普段の通信・自己表現手段（SNSやSMS、通話）として利用していることが多く、検索ワードを基により深く追求する経験不足にはTT授業による机間指導が有効に働くことがわかった。

2) 実習期間中の指導

実習期間は本学科教員が分担して実習巡回にて指導を行うが、実習の中盤にあたる土曜日を帰校日とし、これまでの実習を通して学んだこと（①実習園の保育・教育で気付いたこと、②楽しかったことや嬉しかった、上手くいったこと、③困ったことや迷ったこと、苦労していることなど）を振り返ったり、グループ内で共有したりすることとした。

まず、自己の振り返りでは、①－③について付箋に記入し、その後小グループを作って他の園の様子や実習の状況など意見を出し合い、KJ法を参考にまとめていく（図4参照）。この結果以下のような感想が見られた。

自分が悩んでいた事が、話を共有することで皆も同じ状況だと分かり安心した。また、困ったことばかりでなく、嬉しかったこと、楽しかったことも沢山あるから皆実習を頑張れていると思った。残りの3日間は子どもたちに目を配りながら、周りにも気配りができるよう心掛けることを目標に実習に取り組みたい。以下略【学生A】

今日、自分の振り返りや他の園の情報を聞いて、それぞれの園で違いは出てくるものだなあと改めて思いました。○○幼稚園と□□幼稚園では抱っこやおんぶが禁止ということを聞いて驚きました。また、△△幼稚園で方言が禁止ということを聞き驚きましたが、理由を聞き納得しました。理由は、正しい日本語を教師が話すべきだという方針でした。以下略【学生B】

昨日までの7日間の実習を振り返って、気付いたことや自分も成長できたと思ったことがたくさんあったけど、困ったことや課題点も沢山

ありました。たくさん子ども達と関わる中で子ども達への対応が難しかったり、促してもなかなか聞いてくれなかったりしたこともあり
ました。他の園の情報も聞いて、同じことで困っている人もいれば、
違った嬉しさがあった人もいました。以下略【学生C】

このように、付箋でまとめていくことで各園の実習で得られた気づきの
共通点や相違点があることで、単なる情報共有に止まることなくより有意
義なグループ交流とすることができたことが伺える。

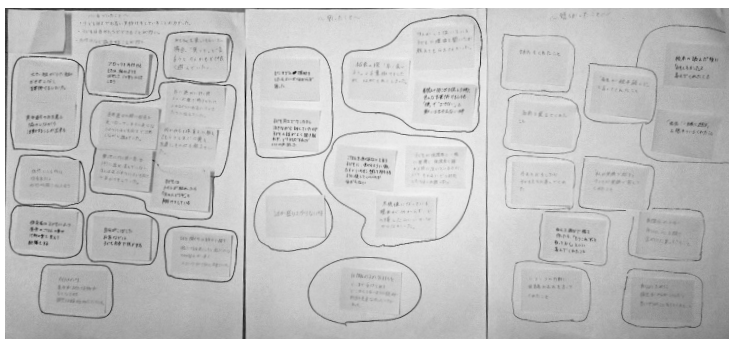


図4 付箋をもとにまとめた学生の感想

3) 実習後の指導 (AM)

AMでは、帰校日の中間交流で得られたそれぞれの課題や明確になった
目標をもとに、学生が実践したことや課題の解決方法を交流する機会と
なった。また、同時にお世話になった園へのお礼状の書き方を指導すると
ともに今後の見通しについて伝えることで、半年後にある教育実習Ⅱに向
けての心構えをもつことを目的とした。

AMでは、自己の実習の振り返りを書き、学生が実習先で得た課題を事
例に、同様の経験をしたことやそれらの解決法について実習園での経験を
交流した。各園では、異なる方針で園の運営が行われており、園児への関

わり方は様ではない。大学での理論的な学びがすべて現場で活かされるということではなく、あくまでも大学での学びをきっかけとして現場での経験を積みながら活かされると考えられることから、AMにおいても理論的な学びをベースとしつつも課題に対して一つの答えをだすのではなく、各園の実態や方針をもとに多角的に捉えていくよう心掛けた。

その結果として、保育者としての考えの形成を促すと共に、自分の考えに近い園方針を見つけたり、より学びが大きいと感じられる園に気付いたりすることで、数か月後に始まる就職活動の適性についても考える機会となった。また、お礼状の書き方や実習園への訪問の仕方など、社会人としてのマナーを知り今後の教育実習Ⅱへとつながるように配慮した。

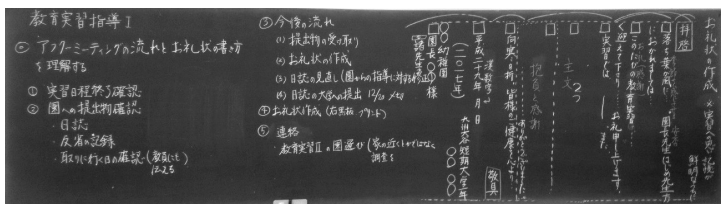


図5 実習事後指導の板書

4) 授業評価アンケートによる課題の精査

表2には教育実習指導Ⅰに対する学生の授業評価アンケートの集計結果を示した。

各項目ともに概ね70%程度の学生が「はい」または「どちらかと言えばはい」と肯定的な回答をしており、最も高い割合を示した質問項目は2項目目の「内容を理解できたか」(80%)であった。この結果は、今回の綿密な授業計画を立て、振り返りを行った結果であると考えられた。また、「いいえ」または「どちらかと言えばいいえ」という否定的な回答をした学生は4%程度で留まったことから、TT授業によるきめ細やかな指導が全体に行き渡った結果であると考えられた。一方で以下のような自由記述欄の回答があった。これらのことは、学生の探求心を充足した結果とは言えず、

「どちらとも言えない」と回答した学生が25％程度見られていることに反映している可能性も考えられるため、今後授業内容をよりわかりやすくしたり、アクティブラーニング等を取り入れたりすることによって、より主体的な学びを活かし理解度を高めていく必要がある。

表2 授業評価アンケートの結果

	はい		どちらかと言えははい		どちらとも言えない		どちらかと言えはいいえ		いいえ	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
○ 授業を意欲的に受講したか	26	(37.1)	27	(38.6)	16	(22.9)	1	(1.4)	0	(0.0)
○ 内容を理解できたか	24	(34.3)	32	(45.7)	12	(17.1)	1	(1.4)	1	(1.4)
○ 考え方、能力、知識、技術などの向上に役立ったか	32	(45.7)	23	(32.9)	13	(18.6)	1	(1.4)	1	(1.4)
○ シラバスの記述は適切であったか	22	(31.4)	23	(32.9)	22	(31.4)	1	(1.4)	1	(1.4)
○ 教員の熱意を感じたか	23	(32.9)	28	(40.0)	16	(22.9)	1	(1.4)	2	(2.9)
○ 教員の教え方はわかりやすかったか	19	(27.1)	30	(42.9)	16	(22.9)	3	(4.3)	2	(2.9)
○ 教員と学生のコミュニケーションは取れていたか	21	(30.0)	29	(41.4)	17	(24.3)	2	(2.9)	1	(1.4)
○ 授業方法は工夫されていたか	22	(31.4)	24	(34.3)	20	(28.6)	2	(2.9)	2	(2.9)
○ 教員の話し方は聞き取りやすかったか	21	(30.0)	28	(40.0)	19	(27.1)	0	(0.0)	2	(2.9)
○ 教科書や参考資料は適切であったか	22	(31.4)	29	(41.4)	15	(21.4)	3	(4.3)	1	(1.4)
○ 板書やスライドはわかりやすかったか	25	(35.7)	27	(38.6)	16	(22.9)	1	(1.4)	1	(1.4)
○ 良好な勉強環境を保つ配慮がなされていたか	23	(32.9)	24	(34.3)	18	(25.7)	3	(4.3)	2	(2.9)
○ 総合的に判断して良い授業だと思うか	26	(37.1)	23	(32.9)	18	(25.7)	1	(1.4)	2	(2.9)
合計 n=70										

- ・ 1つの事例についてもっと考えを深められたらよかった。もっと学生にも考えさせても良いと思う。【学生D】
- ・ 実習指導はもっと厳しく指導して欲しい。【学生E】
- ・ 説明が雑である。もっときちんと伝えて欲しいし、決めたことはそれで固めて欲しい。【学生F】

3. おわりに

今回、教育実習指導Ⅰの取り組みを整理し、学生へ課したレポートから学びやニーズを把握するとともに、本学自己点検評価委員会にて実施した授業評価アンケートの結果を踏まえて今後の指導に向けてのあり方や課題について検討した。これまでの教育実習指導の実践を踏まえて、指導担当教員それぞれの専門性の強みを活かしつつきめ細やかな指導と現代のニーズや学生の状況に合わせたシラバス及び授業計画を構成した。その結果、以下のような成果が得られた。

①授業満足度が概ね良いと答えた結果が7割を超えた。

②AMなどで授業のねらいに沿った感想が見られた。

③TT授業によって、きめ細やかな指導が実現できた。

一方で、次のような課題が残されている。

①授業満足度において、「どちらとも言えない」と答えた学生が2割程度見られた。

②AMで共感に留まり、考えの深まりに欠けた。

これらのことから、次年度以降の教育実習指導Ⅰでは、学生の実態を調査・分析したうえで、上記の課題を活かしたカリキュラムマネジメントを行うとともに、毎回の授業の綿密な打ち合わせを行う。また、今年度の学生に対しては実習指導Ⅱにおいて上記の課題を解決できるよう、アクティブラーニングを積極的に取り入れた主体的な学びを実現できるように、シラバスに具体的な課題を設定していきたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきましたすべての方に心よりお礼を申し上げます。

註

- i 中教審，今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）
- ii 前掲
- iii 文部科学省初等中等教育局教職員課，【資料1－1】教育職員免許法・同施行規則の改正及び教職課程コアカリキュラムについて，平成29年7月4日，4頁

引用・参考文献

文部科学省中等教育審議会，今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm

文部科学省初等中等教育局教職員課，【資料1－1】教育職員免許法・同施行規則の改正及び教職課程コアカリキュラムについて，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/27/1388004_2_1.pdf#search（2017/7/4）

文部科学省 『幼稚園教育要領』 フレーベル館 2017

文部科学省 厚生労働省 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 フレーベル館 2017

石戸教嗣・今井重孝（編）『システムとしての教育を探る』 勁草書房 2011.6.11

民秋 言他（編）『新保育ライブラリ 保育の現場を知る 保育園実習』
北大路書房 2013.8.20